

---

# 夢は希望だと思っていた

霊華@アカガミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢は希望だと思っていた

### 【Nコード】

N48990

### 【作者名】

霊華@アカガミ

### 【あらすじ】

突如、高熱に襲われた主人公に医者から告げられる衝撃の事実……  
この作品は生まれつきホルモンバランスが悪い作者が「もし女性ホルモンが増え続けてたらどうなってたんだろ」と思い考えた作品です

## STORE・01

俺の家は結構昔からある其なりに伝統がある剣道の道場だ

そんな剣道道場の跡取り息子が俺

でも俺は剣道にあまり関心がなかった

小学生のときは父親にいわれるがままに道場に顔を出し門下生と一緒に稽古をしていたけど中学生になってからは好きではないことをやることに疑問を感じ辞めてしまった

そりゃ父親には「お前は道場の跡取りなんだぞ！」等と色々と反発を受けたよ

でも俺は剣道をもう一度やることはなかった

そんな俺だけど土日は必ず道場に顔を出している

うちは母さんが俺が中学に上がったところから仕事の都合で海外で働いていて

いつの間にかに家事が俺の仕事になっていた

それで土日は門下生が朝から通っていて俺が門下生の為にお昼の炊き出しをしているからだ

お昼が出るってこともあるのか以外に受けがよく門下生のお母さん達に評判がいい

たぶん、お弁当を用意しなくてすむからだろう

父さんは炊き出しをするぐらいなら剣道をやってもらいたいみたいだけど俺にはちょっとした料理の勉強みたいでこっちの方が楽しい  
小さい時から料理を作るのが好きで母さんが仕事で家に居なかったから

よく母さんの代わりに食事を作っていて、もしかしたらその流れで家事をするようになったのかもしれない

それに二つ下の弟は料理や家事に興味を持たず何もしなかったし…

> b r < > b r <

そんな俺、みなつき さつき水無月咲月は

結局一度も竹刀を握らず中学卒業を迎えた。  
今でも道場にはお昼のを用意する為に顔を出しているけど、やっぱり剣道をもう一度やろうとは思わない

進学先の高校も中学生の間にやりたい事が見つからず家から一番近

いって理由だけで決めたくらいだ

一応母さんが帰国したときに相談して「料理のお勉強ができる学校にいれば良いんじゃない？ 緋詞は料理を作るの好きでしょ」って言われたけど今一ピントこなく

料理を作るのは好きだけどあくまでも趣味ってだけで本格的に習ったり仕事にしてお金を稼ぐ為にやろうとは思えなかった

生まれでから一度も夢を持った事がない。そのせいだろうか将来のビジョン的な物が見れない、これから俺はどんな道を進むのだろうか？

.....

.....

.....

.....

.....

高校の入学式の三日前、俺は突然に高熱に襲われた

入学式当日になっても熱が下らない俺を心配し父さんは大学病院

に連れていつてくれた

それで診察を受けた結果だが診てくれた医者には解らないらしい

そして精密検査をする為に俺は病院に入院することになった…

医者に解らない病気って何なんだろうか？

ただ単に診た医者が専門の医師じゃなくて解らなかっただけなのか？

でも此処は大学病院で各分野の担当医師がそれぞれ居るはず……

まさか…診ても解らない新たな病気でも発病か未知の病原菌に感染してしまっただろうか？

だとしたら……俺は…し……死ぬのか？

そ、そんなわけな……い、嫌だ！俺はまだ自分の夢を見つけていないだぞ？！

夢もないまま普通に生きてきた……だけど…いつかは自分の夢を見つけ夢のために人生を生きていくのかと思っていたのに！

最後が絶望だと……ふざけるな！？畜生！………

検査から5日ようやく検査の結果が出たと俺の担当医の宮本洋一先生が伝えに来て結果の説明を始めた

「検査の結果で咲月くんは命にかかわるような病気ではありませんでした。ですから安心してください」

……よかった……死なないのか…死なないです済むのか

検査の結果が出るまで5日間いつこうに下らない熱

父さんは他の道場や学校に出稽古に行かなければいけなかったから毎日来てくれる訳じゃなく弟も新学期が始まり忙しいのか一度も見舞いに来てくれなかった

熱が下がらない不安。医者にも精密検査をしなければ解らない程の病状

ずっと看護師しか来ない白いこの病室で独り寂しく不安と死への恐怖に押し潰されそうで寝れなかった

今も熱で多少キツイけど少しだけ楽になったような…やっと死への恐怖からの開放された気分

だけど…その喜びは続かなかった……

「ご両親に確認をとったのですが咲月くんは生まれつき身体のホルモンバランスが悪いみたいで…」

……は？

「そのホルモンバランスが更に悪くなり、それで身体が安定を求め熱がでたんでしょう」

生まれつきホルモンバランスが悪い？初耳なんですけど！

……そういえば小さいときによく熱を出して寝込んでいたけど…もしかして今回と同じ理由だったのか……？

だったら教えといってくれば良かったのに…馬鹿みたいじゃん熱なんかで死ぬとか思って……

「それですね、咲月くんの身体では現在進行形で急激に女性ホルモンが生まれ増え続けています」

………？…女性ホルモン？



「ホルモンのバランスが悪くなったのもそれが原因だと検査の結果でわかりました。……たいへん言いにくいのですが…咲月くん」

「……はい」

な、なんだ？ 言いにくいってなんだ？……なんでそんなに重い空気を出しているんですか？

「咲月くん…女性ホルモンに急激な増加に合わせ馴染ませるかのよ  
うに君の身体は女性に近づこうとしています…いえ近づき創めています」

な、なななな

「な……なんですか…それ…」

何を言っているんだこの医者。俺が…俺の身体が女性に女に近づく？

なにそれ？ 意味がわからない理解ができない…そんなことあるわけがない

「…あくまでも女性に近づくことで完全な女性の身体になるって訳ではありません……今は頭が混乱して認められないかもしれない

ませんが…落ち着いたら後日に…両親を交えてちゃんとお話ししよう」

そう言い先生は病室から出ていった

…身体が女性に近づくとどういふことなんだろう？

よく漫画とかで完全な女性になってしまう話があるけど其とは違うのだろうか？

其から3日後、正月やお盆でも帰ってこない母さんが帰国しビックリした！！

仕事の手が空いたときにしか帰ってこないのに…それほど俺は深刻なのだろうか？

母さんが父さんと見舞いに来てから数分後に宮本先生が病室に入ってきた

勿論、俺のこと俺の身体に起きていることを二人に説明するのと俺に説明し直す為だ

先生の説明し始めると二人は真剣な顔つきになった

父さんの真剣な顔は道場でよく見ていたけれど母さんの真剣な顔は初めて見たので内心驚いたのは内緒だ

説明を受け二人は驚くような素振りは見せなかった

まるで二人とも俺の身体がこうなる事を知っていたような……覚悟していた、そんな雰囲気を出している感じだった

先生の説明によると3日前に聞いた通り俺の身体は女性ホルモンの大量分泌により馴染ませるように女性に近づく

そして詳しく説明された

完全な女性に……女体にはならないが骨格と陰部を除く全ての部分が女性らしくなり

体つきが丸くなり肉も女性らしい柔らかい柔軟性がある物になる

そして徐々に乳腺が発達し乳房が膨らみ大きくなり括れも細くなつて、お尻も丸く大きく女性らしくなるらしい……

更に説明は続き俺に男の俺にとって驚愕な真実が言い放たれた

陰部つまり股間……その男性としての機能が働かなくなる

それは勃起と射精……生殖器としての役割が無くなるということ

その説明がされるまで真面目に先生の話を聞いたけど思わず顔を伏せてしまった…

これから将来的に愛した女性と結婚したとしても子供を授かることができない

それ以前にオカマやニューハーフでもないのに女性みたいな身体をしている俺に愛どころか好意を持ってくれる女性があらわれるだろうか……きつとしない

不安が一気に俺の思考を掛け上がった。夢がなく将来のビジョンが見れなかった

けど普通に大学を卒業し普通に会社に入社し誰かしらと結婚して子供が出来て暖かい家庭を築くのかと思っていた

其が普通だと思っていたのに……其が一瞬にして無くなって真っ暗に

……

「……うつ……ひぐ……」

俺は不安に耐えきれず涙がこぼれ……泣いてしまったな

恐くて何も見えなくて恐くてどうしようもなく……ただ涙が溢れる

「……咲月」

「……か……母さん……俺……ふ、不安で……恐くて……」

「……」

「……どうなる……のか……俺は……しょうらいどう……なっ  
ちやうん……だろ……」

「……ごめんね……咲月」

「……?」

……なんで母さんが謝るだろう?……

「ちゃんとした……男の子として産んであげられなくて……ごめ  
んね」

そうか……そういうことか……

最初は母さんが謝る意味が理解できなかったけど全て理解し

「……………そんな……………俺こそ……………うう……………うあああああ」

俺は何年ぶりになるだう？母さんに抱かれ母さんの胸で泣いた

母さんも辛いはずなのに……………いやきつと、ずっと辛かつはず

俺を普通の男として産めなかった苦しみ

いつかこうなってしまうことを知っていて告げず黙ってしまった  
後悔

母さんも泣きたかったはずなのに俺だけが母さんの強さに甘え俺  
だけが泣いてしまった……………

ごめん…

ごめんなさい…

ちゃんとした男として産まれてこれなくて…

ちゃんとした男として成長できなくて…

母さんと父さんを苦しめてしまって…

.....ごめんなさい

.....ごめんなさい.....

STORE・02(前書き)

短いです



## STORE・02

あんなに長い間を泣いたのはいつ以来だろうか……

泣き止んだら今度は父さんから黙っていたことの謝罪に後悔を告げられた

ショックだった

道場では門下生に厳しく剣道を教えていた父さんが息子の俺に頭を下げたのだ

正直、父の頭を下げた姿など見たくなかった…

実の息子に頭を下げるなんて……

父さんの謝罪と後悔

黙っていたこと一人の男として父親として俺をちゃんと導き育てられなかったこと

……なんで、なんで謝るのだろう……

黙っていたのはしょうがないとして、導けなかったのは父さんのせいじゃない

俺が、こんな身体で産まれてきてしまい自分で剣道を投げ出したのが悪い

> b r < > b r <

俺は自分が許せなかった

母さんに辛い思いを父さんに頭を下げさせてしまったこと

二人は15年近くも苦しんできたというのに現実を受け止められず泣いてしまった自分の心の弱さに

> b r < > b r <

……

……

……

……

.....

.....

.....

> b r < > b r < しばらくし宮本先生がこれからについて説明を始めた

俺の身体の変化を今年一年は診るということ

女性ホルモンが増えて、これからも生まれ続けるので体内：内蔵等に影響が出るかもしれないかららしい

健康診断みたいな物なので通院は月に一回いいみたいだ

あとは、もし俺の意思で性転換手術がしたくなったら早急に必ず伝える

それで手術が可能な年齢の20歳になったときに手術の許可の早さと戸籍の変更のための裁判所への手続きに違いがでるらしい

俺はオカマでも性同一性障害でもない

だから普通の男の身体に治してほしかったけど、治療の為に男性ホルモンを使うのにリスクが生じ内蔵か肝臓に影響が出るので諦めた

最後に睾丸から男性ホルモンが生まれ続け女性ホルモンが多い形で安定しはじめているホルモンバランスが再び悪くなる恐れがあるので手術でタマをとってしまった方がいい言われた

俺は即決し手術を受けることを承諾した

母さんと父さんは

「持つと考えた方がいい」

って言うてくれて先生は

「しばらくは大丈夫だから」

と宥めなれたけど

もう子供が作れない男性ホルモンを生み続けるしか機能を果たさない下手したら、また熱が出で入院するハメになるかもしれない

母さんと父さんの二人に心配をかけるのはもう嫌だ

だから俺は即決した

> b r < > b r < > b r < > b r < > b r < > b r < > b r < > b  
r < > b r < > b r <

手術は夏休みになり、これから1ヶ月は準備期間になり学校を休学することになった

……まだ入学もしていないというのに

数日もすれば熱が下がるらしいけど必要なことだからしょうがない

> b r < > b r < > b r < > b r < > b r < > b r < > b r < > b  
r < > b r < > b r < > b r <

STORE・02（後書き）

書きたいことを上手く纏められない

誰か文才を分けてください（泣）

## STORE・03（前書き）

かなり遅くなって申し訳ありません（汗）

更新ですが物凄く短いです。

## STORE・03

アレから三日、宮本先生の言った通りに俺は退院することができた。

今は母さんが退院手続きをしてくれている。俺は駐車場の母さんの車の前で待っている。この後、どこか行くらしいけど嫌な予感がしてしょうがない。

「どこに行くくらい教えてくれてもいいのに……」

しばらく待っていたら手続きを終えた母さんが来た。

そのまま車に乗り街の方に向う。いったいどこに行くというんだ。

「ねえ、これからどこに行くの？」

我慢できずに聞いてみると予想外の答えが母さんから返ってきた。

「え？　どこってエステだけど、何か問題ある？」



うん、問題だらけだ。何で俺がエステに行かなければいけないんだ？ まったく分から。

もしかしたら母さんが行くだけでもしれないけど、それだったら途中で俺を家に降ろしていけばいい。

「……もしかしてエステって俺が受けるの？」

恐る恐る聞いてみると「そう」と、笑顔で返された。やっぱり俺なのか…

「何で俺が……？」

理由がまったくもって分からないんですけど。

「何でって、咲月の身体は女性に近づくのよ。女の子が無駄毛をはやしていたら変でしょ？」

確かにそうだけど、それじゃあまるで俺が女性の格好をするみたいじゃないか！。確かに俺は身体が女性に近づくことを受け入れた。けど俺は女性の格好をしようとは思っていない。

この様子だとエステの後に何処に行くか予想ができる。きっと女物の服を買いに行く気だ！

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

いろいろと反対したものの結局、母さんを説得できずにエステに行き無駄毛の処理等レクチャーを受けた。

俺を担当してくれたお姉さんは男の俺が無駄毛の処理とかを聞いて変に思わなかったんだろうか？。嫌な顔をいつさいせず笑顔で毛の剃り方を教えてくれた。俺としては助かるんだけど内心「気持ち悪い」とか思われていたらどうしよう…。

あと、ついでに無駄毛の処理とマッサージしてもらった。マッサージ中に「裸が綺麗でいいですね」って言われた。もし、これが「男のくせに」とかの裏返しの意味だったら嫌だなあ。

幼なじみにも「咲月はどうして男なのに肌も綺麗で髪がサラサラなのよっ！」って理不尽に怒られたこともあったし。

たぶん俺の肌が綺麗で髪がサラサラなのは体質のせいなんだと思う。多少は疑問に思っていたが自体の体質を知って理解できたような気がする。

それと髪が伸びる速さが他の男友達たちと比べて速いのもたぶんそうなんだろう。

などと考えてたら次の目的地に着いた。きっとここでも男としてのプライドが簡単に打ち砕かれるだろう。

……覚悟するしかないか……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4899o/>

---

夢は希望だと思っていた

2011年1月16日07時03分発行